

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05587・19K20796

研究課題名（和文）中世ドイツ文学における「アーサー王物語」の脱定型と騎士道の相対化

研究課題名（英文）The reform of the Arthurian romances in medieval german literature

研究代表者

松原文（松原文）（MATSUBARA, Aya）

立教大学・文学部・助教

研究者番号：70827245

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：中高ドイツ語のアーサー王物語の諸作品は13世紀初頭にフランス文化の受容によって生まれるが、その後はモチーフの借用や再編成で独自の発展を遂げる。本研究は『パルチヴァール』と、1970年代まで「古典」の模倣作品と評された『王冠』を主な対象とし、ガーヴァーンの人物造形と美德概念「誠実（triuwe）」に関する表現を分析した。その結果、『パルチヴァール』を転回点として作品世界の価値が多文化し、自律的な人物像が現れたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

騎士の美德は中世ドイツの宮廷文学の主題であるが、その概念研究は、過度の一般化や、推測が先行する循環論法が反省された結果、近年は空白傾向が続いた。本研究は「誠実（triuwe）」という語の用例分析を出発点として、「古典」以降の作品において価値が宮廷世界から解放され多文化したことの一端を明らかにした。これは『パルチヴァール』以後に作品構造や人物造形における伝統からの脱却が見られることと軌を一にするもので、既存研究を新しい角度から補完した。

研究成果の概要（英文）：Arthurian romances were brought into German literature through adaptation of the French culture in the early 13th century. The next generation works had, on the other hand, been written independently by utilizing the motifs from the earlier works and by recombining them. This study focused on "Parzival", one of the so-called 'classical' works, and "Diu Crone", the 'after-classical' work, and analyzed a virtue concept "triuwe" and the character formation especially in Gawan-figure. This study proved that "Parzival" was a turning point where the system of values and the standard of structures diverged, and an autonomous figure appeared.

研究分野：ドイツ中世文学

キーワード：ドイツ文学 中世文学 アーサー王物語 ガーヴァーン 聖杯物語 宮廷文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アーサー王物語はドイツ語圏において、古伝話からの翻案作品で受容された。原典作品はフランスとドイツの皇帝や有力諸侯の政治的・文化的交流によってドイツの宮廷にもたらされたものである。これをドイツ語に翻案し受容することは、宮廷を構成する「騎士」階級の娯楽や教養となり、宮廷の権勢を示すことになったと見られている。文学作品としてのアーサー王物語を誕生させたのはクレティアン・ド・トロワである。彼の4つの作品のうち3つは、北フランスで作品が成立してから30年とたたない1210年頃までに、ハルトマン・フォン・アウエとヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハによって古伝話から中高ドイツ語に翻案された。この13世紀初頭は宮廷叙事詩だけでなく、叙情詩も多く残され、ドイツの俗語の文芸の最初の興隆期といわれる。

主要な作品の写本が次々と再発見された19世紀初頭以降、中世文学研究は13世紀初頭前後の文芸興隆期の「古典」的作品、すなわち三大詩人と言われるハルトマン、ヴォルフラム、ゴットフリートの作品に集中した。文献学的研究、素材研究、そしてロマン主義的な解釈に偏った時期を経て、戦後は作品の構造に注目が集まった。

一方、三大詩人の作品以外のいわゆる「古典以後」の作品の研究が緒についたのは遅い。「古典」的作品は、共通して二段階構造を持っていた。(主人公の騎士が冒険を重ねるなかで一度存在の危機を経験し、それを乗り越えることによって真の栄誉を獲得して、アーサー王宮廷の繁栄を導いた。)それに対して、「古典以後」の作品は二段階構造を持たず、主人公の内的発展を通じた騎士道の理想の表現という明快さに欠けていた。また「古典以後」の作品は直接の古伝話の原典を持たず、三大詩人の「古典」をはじめとする独伝の様々な作品からエピソードやモチーフを借用し、新しく組み立てたものである。以上のことから、「古典」を模倣した亜流であり、理念のない単なる娯楽作品だと低く評価されたのである。

脱構築主義の広がる70年代以降、「古典以後」の作品が本格的に研究の対象となる。本研究が取り組む『王冠』や『ヴィガロイス』、『ランツェルト』については、19世紀半ば以降、基本的な研究資料が更新されない状況が続いていたが、2000年代に入って新しい校訂版や現代ドイツ語訳、注釈が出版された。たとえば『王冠』は約30年の計画と準備を経て、新しい刊本がフリッツ・ペーター・クナップ(ほか)によって2000~2005年に出版された。メンバーにフローリアン・クラウグル(なおクラウグルの2006年の博士論文は『ランツェルト』の校訂版と注釈)を加え、2012年には現代ドイツ語訳が出版された。また注釈は2005年に出された(グードルン・フェルダー、博士論文)。なお日本語では『ランツェルト』の翻訳と解説(2010年)と、長大な『王冠』の翻訳の研究論集における順次発表があるが、研究論文はほとんどない。

「古典以後」への関心と並行し、「古典」の研究もまた多角化し、新たな段階に入った。80年代以降はイロニーや語りの作用、作者性などの新しい切り口が生まれた。その際、「古典以後」の作品との間テクスト的考察も有益である。文献学的研究も写本のファクシミリ化やテクストのデータベース構築によって再び研究の中心課題となった。例えばヴォルフラムの『パルチヴァール』研究で用いられる従来の校訂版は主に2つの写本(DあるいはG)のみに基づいていたが、現在80余りの全写本を比較対照するプロジェクトが進行している。また2012年には多数の研究者が結集し詳細な文献目録を備えたハンドブックが出版され、現在は新訳と注釈も作成中である。

2. 研究の目的

研究史では長い間、「古典」的アーサー王物語とは二段階構造を持ち、挫折を乗り越えて真の徳を獲得して宮廷の繁栄を導く主人公が描かれるものとされた。この定型に当てはまらない「古典以後」の作品は、単にエピソードが羅列される娯楽作品であり、「騎士道」の理念を伝える価値ある作品ではないと見られてきた。それにたいして、本研究は「古典」の中でもとりわけ優れた写本伝承状況を持ち、13世紀において大きな影響力を持っていたと推測される『パルチヴァール』の中に、すでに定型からの大きな逸脱があり、「騎士道」における美徳概念の揺らぎが認められることに注目する。『パルチヴァール』とその後の作品の接続性を分析し、アーサー王物語の中世ドイツにおける独自の発展を考察する。またフランス文化の紹介から独自の発展へと作品の成り立ちを変えていく13世紀前半、宮廷社会において文芸に求められていた機能はどう変化していったのか、美徳概念の分析をとおして解明を目指す。

3. 研究の方法

(1) ガーヴァーン像

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチヴァール』はクレティアンの未完の『ペルスヴァール』の翻案である。未完ゆえにフランス語圏でも複数の続編が生まれたこのグラールの物語について、ヴォルフラムは大幅な改変や結部の補いによってひとつの完成形を示した。グラール世界が登場したことにより、『ペルスヴァール』・『パルチヴァール』の作品世界は宮廷と非宮廷世界の対立構図から、宮廷とグラール城と異教世界の3つが交差するものとなっている。「騎士道」の追求は必然的に問い直されることとなる。

ヴォルフラムは主人公パルチヴァールを最終的にグラール城の解放者に、「第二の主人公」の位置にあるガーヴァーンをアーサー王宮廷の抱える問題の解決者とした。研究史においては長い間、宮廷はグラール城に倫理的に劣るとされ、真の徳に到達する主人公パルチヴァールにたい

して、様々な女性との恋愛と冒険を繰り返すガーヴァーンは、世俗的で軽薄と評価された。しかし、定型の二段階構造に照らすと後半の高次元の冒険を担うのは「第二の主人公」ガーヴァーンであり、パルチヴァールは最終場面までその影で数回足跡の形で存在を示すのみである。また、グラール城の危機がその内部から解決されることはない。ヴォルフラムの強い影響が認められる「古典以後」の『王冠』や『ヴィガロイス』では、パルチヴァールでなく理想の騎士と評されるガーヴァーンあるいはその息子が主人公となり、聖杯に到達することとなる。本研究はガーヴァーン描写を「古典」と「古典以後」の間で比較し、その位置を問い直す。

(2) 美徳概念

「誠実」(triuwe)と「男女の愛」(minne)はヴォルフラムの叙事詩においてしばしば対立的に扱われる。結婚した男女の triuwe と精神的な純愛の triuwe に価値が置かれる一方、度を越えた minne は苦しみと喜びを伴う物語の主題となる。『パルチヴァール』では、minne に囚われるガーヴァーンの物語にミンネ論が挿入され、reht minne ist wâriu triuwe (532,10)「正しいミンネは真の誠である」と言われる。また、パルチヴァールの従姉シグーネを主人公とする伝説原典のないヴォルフラム独自の派生作品『ティトゥレル』では、wâre minne mit triwen (4,4)「誠を持つ真のミンネ」がグラール城の王の家系で受け継がれる特性とされている。

triuwe と minne の対立化の一方で、ヴォルフラムにおいて triuwe という語は多用され、triuwe の指す内容は拡大もしている。詩行数あたりの用例はハルトマンやゴットフリートの二倍を超え、その 3 割程度は具体的内容を伴わない単なる強調表現である。また男女の愛ではなく宮廷や主君との結合を表す場合も多く、triuwe の多義性を通して重層的な社会関係を生きたことの困難を表しているとも解釈される。

本研究では、クレティアンの原典に対応語の存在しない triuwe という語が、中高ドイツ語のアーサー王物語のキーワードとなった実相を示し、これらの美徳概念が物語の具体的な筋の表面を覆うことの意味を考察する。そしてヴォルフラムという転回点を経て、美徳概念のその後どのように継承されたのかをたどり、宮廷社会における文芸の位置を考える。

4. 研究成果

(1) 『パルチヴァール』におけるガーヴァーン像

「秘密」のモチーフの解釈

ガーヴァーン物語の末部に、ガーヴァーンが自分の名と素性を、人々に対して、(それが自分の生き別れの母や妹であるにもかかわらず)秘匿する場面がある。この「秘密」のモチーフはケルト神話に由来する。だが「秘密」を前との連関なく登場させ、その直後で作品が断絶しているクレティアンの絶筆の原典にたいして、ヴォルフラムはこのモチーフを有機的に拡大した。「秘密」は神話的外見を持ちつつも、『パルチヴァール』ではこれを起点とする混乱とそこから回復が綿密に計算されている。アーサー王の甥で宮廷の榮譽を第一に考えるガーヴァーンには、自らの名を明かし冒険の功績を喧伝することは避けなければならないという論理が働いたと推論された。「秘密」のモチーフを通じて主人公とガーヴァーンの属性は強く対比されている。ヴォルフラムは宮廷性の象徴であり理想の騎士と謳われるガーヴァーンにおいて、騎士の美徳概念である「誠実(triuwe)」の陰の面を描き出し、価値を相対化したのである。研究成果は雑誌論文(2019)にまとめた。

パルチヴァールとガーヴァーンの間馬の交換

騎士(ritter)という語の語源に關係する馬は、騎士が主人公となるアーサー王物語で重要なファクターである。馬の中には名を持ち、騎士のアイデンティティと結びつくものもある。ただし研究史において馬は、物語の筋の上で馬に直接焦点があたるハルトマンの作品について先行研究があるものの、『パルチヴァール』研究ではほとんど注目されなかった。本研究ではガーヴァーン物語において不在の主人公パルチヴァールだが、二人は作品後半において互いに認識することなく互いの馬を交換している点に注目した。パルチヴァールの犯した罪をガーヴァーンが背負い、また互いの力を馬を通して共有したものと解釈された。主人公の二重化というクレティアンの導入した未解決の課題について、ヴォルフラムは異なる両騎士の(あるいはアーサー王宮廷とグラール城の)二項対立や優劣で解答を見つけようとはしなかった。二人の差異を互いの内に内包させることでエネルギーを生み、解決をはかったのである。研究成果は図書(共著)(2019)にまとめた。

(2) 美徳概念

ハルトマンの『イーヴァイン』、『エーレク』における美徳概念の発展

ハルトマンとヴォルフラムにおける triuwe と minne の 2 語の使用例を分析した。minne の問題視と抑制の主張、「中庸」(mâze)の重視がハルトマンからヴォルフラムに引き継がれたことを明らかにした。また、ヴォルフラムの詩作初期に書かれた叙情詩(主にターゲリート)における minne 観と、のちの叙事詩にあらわれる minne と triuwe の対立に連関があることを確認した。ハルトマンからヴォルフラムにいたる美徳概念の発展にかんしての研究成果は、学会口頭発表(2019)で報告した。

美德概念の先行研究と方法論

1920～30年代には「古典」的叙事詩やミンネザングを対象として *triuwe* や *māze* をはじめとする美德概念の体系化が目指されたが、明快な関係図を描くことや起源の確定は断念された。そして、過度な一般化や推測に基づいた結論によってゲルマンイデオロギーに傾くことを恐れられ、その先の認識の可能性は模索されなかった。だが、これらの概念の用い方の差異の背景には作品や詩人の特徴があり、語彙研究には今後も意義がある。宮廷叙事詩への限定を取り払い、*Lehrdichtung* と呼ばれる騎士の教化を目的とする短い韻文作品ジャンルやザクセンシュピーゲルをはじめとする法律書を参照し、用例を突き合わせて分析する必要を認識し、資料収集し、類似の用例を一覧化した。また文芸作品を構造の精緻や内容と表現の共鳴等の内在的価値ではなく、パトロンや受容者が期待した政治的・社会的役割の観点から見ることにより、いわゆる「古典」とそれ以後の断絶を解消できる可能性を確認した。

『王冠』における美德論

『王冠』は1220年代にハインリヒ・フォン・デム・テューリンによって書かれたアーサー王物語である。ハインリヒは作中で原典に基づいて書いたと述べる(29970行目)が、現在の研究では、ハインリヒは独仏のアーサー王物語の諸作品からモチーフやエピソードを収集し、それを独自の構想でつなぎ合わせた作品という捉え方が支持されている。『王冠』における美德を表す代表的な概念の用例を一覧化した。その際、ポーフム大学を中心とする中高ドイツ語の言語学研究者の方法を参考に、共に用いられる語彙等にも注目し分析中である。

定型の二段階構造を失い、冒険の羅列と見える『王冠』において、宮廷人の持つべき美德については長大な作品の中でもたくさんの詩行が費やされて論じられる。その多くは筋からはみ出した意図的な挿入部分に集中的である。婦人や騎士の徳を試す作品冒頭の「魔法の杯」や中盤の「魔法の外套」のエピソードといった、いわゆる *Tugendprobe* (人々の徳を試す魔法の道具が登場する)にはすでに仏独の諸作品に伝統があり、研究動向を把握した。その上で、『王冠』や『ヴァガロイス』や『外套』の *Tugendprobe* のエピソードにおいては、*triuwe* や *minne* の叙述が『パルチヴァール』と明確な類似性を見せていることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松原文	4. 巻 86
2. 論文標題 ガーヴァーンの秘密主義と triuwe 宮廷の美德のジレンマとパルチヴァールによる解決	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『詩・言語』（東京大学大学院ドイツ語ドイツ文学研究会）	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松原文
2. 発表標題 特別企画 「笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界』を批評する」第2章 レッシングと非ヨーロッパ世界
3. 学会等名 日本ヘルダー学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松原文
2. 発表標題 ハルトマンからヴォルフラムへー13世紀初頭ドイツにおける翻案と詩作
3. 学会等名 国際アーサー王学会日本支部 2019年度年次大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 渡邊 浩司（編）金沢百枝、増山暁子、渡邊 浩司、横山安由美、村山いくみ、狩野晃一、白木和美、林邦彦、多ヶ谷有子、貝塚泰幸、玉川明白美、松原文、ナタリア・ペトロフスカイア、近藤まりあ、伊藤洋司、篠田知知基（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 484 (331-360)
3. 書名 アーサー王伝説研究 中世から現代まで、松原文「第四部 騎士ガウェインの諸相 ガーヴァーン物語とパルチヴァール 『パルチヴァール』における二人の主人公の接合と馬の関与」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----